修士論文（要旨）
2015 年 1 月

ガ格で終わる文の研究

指導　新屋映子　教授
言語教育研究科
日本語教育専攻
213J3005
大西　力

Master's Thesis(Abstract)
January 2015

A Study of the Meaning and Use of Japanese Sentences Ending in the "Ga"Case : A Corpus Analysis

Tsutomu Ohnishi
213J3005
Master's Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J.F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Teruko Shinya

目次

第 1 章　はじめに ……1
1.1　研究背景と目的 ……1
1.2　研究方法 ……1

第 2 章　先行研究 ……3
2.1　「言いさし文」の研究 ……3
2.2　格およびガ格について ……5
2.2.1　格とは何か ……5
2.2.2　格助詞「が」について ……8
2.2.2.1　格助詞「が」の基本的な働き ……8
2.2.2.2　格助詞「が」と文の情報構造について ……8
2.2.3　動詞のタイプとガ格の関係 ……10
2.3　格助詞「が」の後に来る動詞とその予測 ……15

第 3 章　調査結果および分析 ……19
3.1　「が。」で終わる文の調査結果 ……19
3.2　ガ格で終わる文の調査結果 ……20
3.3　ガ格で終わる文の統語的分類 ……23
3.4　ガ格で終わる文の意味的分類 ……25

第 4 章　ガ格で終わる文の表現性 ……41

第 5 章　まとめ ……44

補

参考文献

第 1 章 はじめに

日本語の中には、格助詞「が」が文の最後に来て「…が。」の形で終了するという文が数多く見受けられる。この「が。」で終わる文には一体どのような働きと意味があるのだろうか。実際にコーパスを調べてみると、多くの実例があることがわかった。普段、日本人が何気なく使っているこの形について、その意味や使われ方を調べてみたいと考えるに至った。

実際のデータ収集に関しては、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(少納言)(KOTONOHA 2012)(BCCWJ)を用いて調査を行った。調査は、まず機械的に「が。」で終止している文を収集し、これらの文の最後が格助詞の「が」であるかどうかについて一文一文判定を行うという形で行った。文の選定にはかなりの困難を要したが、最終的に選定された文に対して、統語的特性、意味役割、表現性などの面から考察を行った。

第 2 章　先行研究

「言いさし文」に関する先行研究としては、白川(2009)をはじめ、荻原(2008)にもあたり、日本語における「言いさし」とは現在どのように捉えられているのかということについて調べた。また、格助詞や格そのもの、ガ格については、仁田ほか(2000)、柴谷(1978)などを参考にし、さらにガ格と動詞との関係においては村木(1991)にあたり、動詞の統語的特性面からの研究を参考にした。

第 3 章　調査結果および分析

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(少納言)(KOTONOHA 2012)(BCCWJ)を、全ジャンル、全期間 (1970-2008)[合計約 1 億 500 万語]を対象として検索した結果、「が。」で終わる文は全体で 12973 件が該当した。採集したデータの中から、今回の研究対象であるガ格で終わっている文を判別し集計を行ったところ 1526 件が該当した。

抽出されたガ格で終わる文を統語的基準によって以下のような４つに分類した。

[Ａ] ガ格の述語に相当するもの (述語として想定されるもの) が先行文脈内に顕在するもの。

[Ｂ]先行文脈内のガ格が当該文において再度取り出されているもの。

[Ｃ]ガ格の述語に相当するものが文脈内に顕在しないが、述語を想定し得るもの。

[Ｄ]ガ格と述語との結びつき自体が想定しにくいもの。

この中では[Ｃ]タイプが最も多く、71.4%を占めることがわかった。

さらに命題の意味を基準に分類すると、以下のような結果となった。

Ⅰ．存在を表すもの

Ⅱ．出現を表すもの

Ⅲ．感覚を表すもの

Ⅳ．非難を表すもの

Ⅴ．その他

「Ⅰ．存在を表すもの」が最も多く見られ、44.03%と半分に近い数であった。

ここで、さらにそれぞれに統語的な分類[Ａ] ～[Ｄ]を当てはめ、考察を行った。

Ⅰ（存在を表すもの）、Ⅱ（出現を表すもの）、Ⅲ（感覚を表すもの）では[Ｃ]タイプが最も多かった。特にⅠ、Ⅱにおいては、実に 90%以上を占めていることがわかった。この

ことから、ガ格で終わる文は、述語が文脈内に顕在するかしないかに関わらず、述語が想定し得る場合に現れやすいということが明らかになった。

第 4 章　ガ格で終わる文の表現性

「が。」で終わる文には特徴的な表現効果があり、効果や症状の出現を表現する場合、完全文ではなく「が。」の形で止めることで期待感を持たせる表現となる。薬や薬剤、マッサージなどの施術、運動の効果または占いなどを表現する際によく使われることを示した。

第 5 章　まとめ

本研究はガ格で終わる文について、主にその統語的特徴、当該ガ格と顕在・潜在する述語による命題の意味、表現機能に注目しての研究となった。収集したデータにはさまざまなものがあり,ガ格で終わる文の多様な様相を見ることができた。文が文中形である「が。」で終わっていても、そこに多くの表現や意図が隠されており、母語話者はその意味やニュアンスを暗黙のうちに予測し、受け止め、理解しているということを改めて認識することができた。

参考文献

安藤貞雄(1986)『英語の論理・日本語の論理』大修館書店
庵功雄 (2001)『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第2版』スリーエーネットワーク
石黒圭(2008)『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』ひつじ書房
内田安伊子・池上魔希子・大野早苗・大島弥生・長友和彦 (1994)「予測文法研究 (1):「が」と「は」の予測機能について」『言語文化と日本語教育』9 御茶ノ水女子大学 pp.134-159
荻原稚佳子(2008)『言いさし発話の解釈理論 「会話目的達成スキーマ」による展開』春風社
影山太郎(1980)『日英比較 語彙の構造』松柏社
金田一春彦(1988)『日本語 新版 (下)』岩波書店
言語学研究会(編)(1983)『日本語文法・連語編 (資料編)』むぎ書房
柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館書店
白川博之(2009)『「言いさし文」の研究』くろしお出版
新屋映子ほか(2003)『日本語運用文法 文法は表現する』凡人社
新屋映子(2014)『日本語の名詞指向性の研究』ひつじ書房
杉浦滋子(2000)「「は」と「が」の機能と述部の意味的性質」『日本語 意味と文法の風景 国広哲弥教授古稀記念論文集』ひつじ書房 pp.47-62
宗宮喜代子(2012)『文化の観点から見た文法の日英対照:時制・相・構文・格助詞を中心に』ひつじ書房
竹林一志(2004)『現代日本語における主部の本質と諸相』くろしお出版
チャールズ J. フィルモア 田中春美 船城道雄(訳)(1975)『格文法の原理 - 言葉の意味と構造』三省堂
塚田浩恭(2001)『日英語の主題、主語そして省略』リーベル出版
寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 第Ⅰ巻』くろしお出版
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』くろしお出版
寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味 第Ⅲ巻』くろしお出版
仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人(2000)『文の骨格』岩波書店
野田尚史(1996)『新日本語文法選書1 「は」と「が」』くろしお出版
畠山雄二(2012)『ことばの分析から学ぶ科学的思考法 理論言語学の考え方』大修館書店
益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版
益岡隆志 (2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版
宮島達夫(1986)「格支配の量的側面」『論集 日本語研究 (一) 現代編』明治書院
村木新次郎 (1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
他

引用資料

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(少納言) (BCCWJ:Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese 2012) 国立国語研究所 URL:http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/